



広報

なほ市民の友

第795号毎月1日発行
2017年(平成29年)

4月

市の人口と世帯	
※()内はうち外国人	
2017(平成29)年2月末現在	
総人口	324,435 (4,175)
男女	157,465 (2,394) 166,970 (1,781)
世帯数	149,528 (2,877)

発行 那覇市
〒900-8585 那覇市泉崎1丁目1番1号
☎(代表)867-0111
印刷 光文堂コミュニケーションズ(株)
配布 那覇市シルバー人材センター

「みんなと同じ」じゃなくていい

～発達障がいの子を持つ親の思い～

他者とのコミュニケーション能力に欠けたり、じっとしていられず授業中でも席を立ってウロウロ歩いている子どもたち。かつては「親のしつけがなっていない」と、子どもの親が責められることがもっぱらでした。

しかし、現在ではこうした行動は、親のしつけ方が

悪かったからではなく、脳内の何らかの機能障がいに原因がある「発達障がい」だと認識されるようになりました。発達障がいの子を持つ親にその理解と支援の現状について伺いました。

障がい福祉課 ☎862-3275



違和感

「とにかく寝てくれなくて困った。夜は30分おきに物凄いい声で泣くので、主人と代わりばんこであやしていた」。和美(40)は、2016年春、小学生になった長男・直樹(7)について静かに語り始めた。好き嫌いでなく何でも食べ、人の目を見てコミュニケーションを図る直樹は、一見何の不自由もない男の子だ。しかし、「広汎性発達障がい」と診断されている。

和美が息子に対して「他の子と何か違う」と感じたのは、直樹が1歳ぐらになつた頃だった。音楽に合わせてダンスなどをする教室に通ったのだが、そこで直樹の見せる態度に、愕然(がくぜん)とした。直樹が体の関節や筋肉を上手く使えていないこと、また明らかに色を理解していないことに気付いたのだ。

「私が母親として未熟だから、この子が育っていないんだ」。和美は自分を責めた。しかし、直樹の行動には気になるところが多すぎる。1歳半児健康診査で心理士に思いの丈をぶつけてみた。その後、保健師から連絡が入り、発達検査を受けることになった。そして、その日にその場で「発達障がいかも知れない」と告げられた。

個性と障がいはさまで

療育センターを案内され、医師から正式に診断名がついたことで、和美の生活は大きく変化した。市の実施している児童通所支援が受けられるようになったのだ。そして、そこでの支援者たちとの出会いは、和美の発達障がいに對する認識をも大きく変化させていった。直樹は想定外のことが起きるとパニックに陥ってしまう。その最た

るものが「転倒」だ。通常子どもは転んだ際、泣いたり親に助けを求めたりするが、直樹にはそれができない。なので、家族はつまずきやすい段差があることを事前に本人に知らせたり、彼が想定外の出来事に弱いということを理解するべきだと思ふようになった。

しかし、そのまま良いとは考えていない。家族はその場に合った適切な行動や言葉を本人に教え続けていかなければいけない。不意に転んだ際、「怒る」のではなく「痛い」と言えるように。

和美が支援者に望むことは、「手に負えない困った子」から「予測や感情表現が苦手な子」という認識への変化。支援以前に、子の思いに寄り添ってほしいと切に願う。

存在を承認する

「人格と行動を分けて考えなければいけない」。和美が終始言い続けていた言葉だ。発達障がいをめぐる「諸問題」は、家族や支援者がこ

れを實踐できていないがために発生する。

無条件でありのままの存在を認めること、そして不適切な行動や言葉だけを修正していくこと。それが本人を安心させ、人間的な成長を促していく。

しかし、少し立ち止まって考えてみると、これは学校や職場などでも通用するスキルだ。だからこそ、発達障がいは自分のこととして捉えてほしい。それがひいては多様性を認め合う社会を作っていくはずだから。

最後に、療育の世界に足を踏み入れることに躊躇(ちゆうちよ)はなかったかと和美に聞くと、「全然迷わなかった」という。なぜかと聞くと、「療育はレッテルを貼られるような場所ではない。子どもも楽になったし、私も楽になった。迷う気持ちも分かるが、ぜひ踏み出してほしい」と笑顔で答えた。

※記事に登場する人物は全て仮名です。

市の取り組み

平成27年度から一括交付金を活用し、『発達障がい者サポート事業』を実施しています。

事業内容として、「ご本人やその家族・支援者などに対する相談支援を始め、人とうまく関わっていくための方法を学ぶソーシャルスキル・トレーニングなど様々なトレーニングの企画・実践を展開しています。

発達障がいの理解と支援スキルの向上を目指すティーチャーズ・トレーニングを受けた市内の小学校教諭は、「否定的に叱るのではなく、今するべきことを丁寧に教えていくことが大切だと気付きました。お互い心に余裕が出てきました」と話します。



▲さぼーとせんたーの小浜ゆかり所長(中央)と職員たち

「一人で抱え込まず、一緒に対応策を見つけていきましょう!」

相談窓口

◆さぼーとせんたーい

場 泊1丁目18の8
問 861-1187

◆さぼーとせんたーいから
(主に思春期・青年期)

場 首里烏堀町4丁目106の4
問 882-4266

市長室

ばいばい! 幹子やいびくん
あなたの腎臓、大丈夫ですか?

市民の皆様、「CKD(シーケーディー)」って、ご存じですか?

今、那覇市の特定健診受診者の5人に1人が、可能性ありと所見されている病気、それが、新たな国民病ともいわれる「慢性腎臓病(CKD)」です。

CKDは、自覚症状が無いまま腎臓の機能が低下し、悪化すると体内の老廃物を十分排泄できずに、人工透析が必要となる病気です。

那覇市では、CKDの発症予防や悪化防止を目的に、昨年4月から那覇市医師会との協働により「那覇市CKD病診連携事業」をスタートさせました。現在、54名の「かかりつけ医(CKD登録医)」及び27名の「腎臓診療医」の先生方に登録いただいております。

今後は、腎臓が悪くなつて、人工透析に移行する方を一人でも多く減らすという目標に向かって、かかりつけ医となる「CKD登録医78名(シーケーディーなほ)」を目指し、「腎臓診療医」との連携を応援していきます。

早期発見・重症化予防のためにも、ぜひ健診を受けて、お体を大切にされてください。

ゆたさるぐとぅうにげーさびら。

那覇市長
城間幹子



さらなるCKD病診連携を誓い、那覇市医師会長の山城千秋先生と固い握手

主な紙面

- 「みんなと同じ」じゃなくていい
- 発達障がいの子を持つ親の思い
- 知ることで守られる新都市「沖繩の杜」
- 情報バック
- 博物館トビックス/ニュースダイジェスト